

中学生における指定靴の使用実態と運動課題遂行能力に及ぼす影響

学籍番号 04M2403 氏名 奥山 真純

1. 研究目的

中学校で使用されている学校指定靴は学年毎に色分けしやすく、コスト面においても安価であるが、サイズのみしか選べず、本人の足型に合った靴を選べないという問題が従来から挙げられている。また近年は踵を潰して履くなど靴の機能を損なう形で使用されることが目立つようになっており、学校内での日常生活のみならず体育などの運動時にも用いられるには成長期の足部保護という点から問題があると考えられる。そこで本研究では、指定靴の使用実態を調査し生徒が持つ足部愁訴との関連を明らかにすること、さらに運動パフォーマンステストを実施し、指定靴の着用が運動パフォーマンスに与える影響についても検討することとした。

2. 対象と方法

市内の某中学校(全校生徒850名)に協力を頂き、予め保護者から同意を得た1~3年生までの820名(男子382名, 女子438名)を対象とし、アンケート調査を実施した。また、各学年より無作為に1クラスを選抜し、卓球部、バレー部、バスケットボール部、バドミントン部に所属している生徒を対象に、T字ドリルと立ち幅跳びを運動靴と指定靴にてそれぞれ実施し、そのタイムと跳躍距離を計測した。なお、運動靴は普段の部活動で使用しているものとした。

3. 結果

アンケート調査の結果より、対象者820名のうち、足部に何らかの足部愁訴を持つ者は123名で、全体の15%を占めた。そのうち、16名が指定靴の不適合をその原因として回答した。また、対象者の約40%にあたる327名が、踵を潰して履く、紐を緩めにして履くなどといった方法で靴を着用していることが分かった。また対象者の21%にあたる160名が指定靴のサイズの不適合を訴えており、そのうちの64名は、入学以来一度も指定靴を交換していない生徒であり、その9割以上が2年生と3年生で占められていた(59名, 92%)。指定靴での体育授業に関しては、対象者の28%にあたる222名が「指定靴では運動しにくい」と回答した。今回の調査では、対象者のうち202名が、指定靴への総合的な満足度に関して「満足していない」と回答しており、中でも「デザイン」に対する不満が最も多く約46%を占めた。また、普段靴を購入する際に最重視する点に関しても、「デザイン」という回答が最も多かった。T字ドリルの結果は、指定靴での平均タイムが10.99秒であったのに対して、運動靴での平均タイムは10.48秒であり、有意に運動靴での平均タイムが速かった($p < 0.05$)。また、立ち幅跳びの結果は指定靴での平均跳躍距離が168.6cmであったのに対して、運動靴での平均跳躍距離は178.2cmで、有意に運動靴での平均跳躍距離が長かった($p < 0.05$)。

4. 考察とまとめ

指定靴のサイズの不適合を予防し、それに起因する足部愁訴などのトラブルを解消するためには、定期的に交換時期を設ける必要があると考える。運動靴と比較して、指定靴は運動向けの構造や機能は十分とはいえず、また踵を潰すなど不適切な靴の履き方のために、さらに足部保護の機能を失った靴で体育授業に参加している生徒が多くいる可能性が示唆された。また、生徒の靴に対する関心はデザインやブランドといった側面に偏る傾向があり、足部保護という点は軽視される傾向にあることが示唆された。さらに今回実施したドリルの結果から、指定靴を使用した場合、主に足底面の滑りの問題のために、運動パフォーマンス能力を十分に発揮できない可能性が示唆され、運動靴を使用した場合と指定靴を使用した場合では、新体力テストなど全国レベルで実施されるテスト結果へも影響を及ぼす可能性が考えられた。

中学生は身体発育が急速に進む時期であり、足部の適切な保護が身体発育や運動能力の発達に与える影響は大きく、体育授業への参加に関しては、足部保護や靴の機能性を優先して、運動靴の導入も前向きに考える必要があるものと考えた。